



# 神様の 発見



川崎ゆきお

「残暑と言うのは続くものですか」

「秋に入っても続きますよ」

「しかし、もうその頃はそれほど暑くないでしょ」

「秋のいつ頃かにもよりますが、初めの頃はまだ暑いでしょ。夏並です」

「じゃ晩秋は」

「ああ、もうその頃には残暑とは言わなくなっているでしょ。あなた言いますか」

「言いません」

「木の葉も紅葉し、冬支度。肌寒いと言うより、寒くなってくる頃です」

「ああ、そういえば、真冬のコートを着て、紅葉狩りに出ましたよ」

「しかし」

「はい」

「いずれ、涼しくなるとは思うものの、待てませんねえ」

「今日は特に暑いですからねえ」

「朝は涼しかったので、これが秋の始まりですよ。そろそろです」

「夜はまだ寝苦しいですよ。熱帯夜です」

「寒くなると、その熱帯夜、懐かしく思いますよ。あの暑さが恋しいと」

「今はそうは思えませんが、それにいくら冬でも暖房で部屋を暖めすぎると、気分が悪くなりますよ」

「はいはい」

「それより、季節の神って、いるのでしょうかねえ」

「さあ、知りませんねえ」

「冬神とか、春神、夏神、秋神とか、いそうな気がします」

「行事ならあるでしょ。この季節の行事。そこに出てくる神様でいいんじゃないですか。同じ神様かもしれません」

「ああ、なるほど、春の田植え前の神様も、秋の刈り入れ後の神様も、同じなんじゃないかねえ」

「神社の前に、そういう行事の予定表が書かれてあるでしょ」

「ああ、気にして見てませんでした。じゃ、その神社の神様なんですか」

「四季のない国じゃ、四季の神様はいらないでしょ」

「夏神と秋神の対決をみたいものです」

「どうして、そんなことを」

「今日はどちらが有利かと」

「そうですねえ、今日は夏神が有利に戦いをやっていますよ」

「風神雷神もいますねえ」

「これは太古からいるんじゃないですか」

「雷神は雨ですねえ」

「雲の上に乗っている鬼ですねえ。背中に銅鑼のようなものを一杯背負っていますねえ。あれで音を出すのでしょうか。ごろごろと」

「鳴り物入りですねえ」

「災いをもたらす雷神ですが、雨の少ない時期は、恵みの雨になります。それに雷は飛び道具ですよ。強力な武器でしょうなあ」

「龍神なんかも水に関係するでしょ」

「話題がどんどん変わりますが」

「こういう話に付き合ってくれる人がいないので、まとめて言ってます」

「龍神さんは水神様とも言うのでしょうか」

「水神様は龍神ですか。雷神ですか」

「さあ、どうなんでしょうねえ。昔から神様の名前を直接言うのは控えていたようです。当然、どんなお姿かは最初からないのでよ。呼び方は違って、同じ神様の場合もあるようです」

「はあ」

「山にいる神だから、山神です」

「越前の守や能登の守のようなものですね」

「直接、名前を呼ばないで官位で呼んでいるのでしょうかねえ」

「じゃ、山の神様にも、本当の名前はあるんでしょ」

「さあ、あっても後から付けたんでしょう」

「曖昧なものですねえ。神様って」

「恐れおおいものの御名は言ってはいけないのですよ」

「それじゃ、秋神ってのは、直截すぎますねえ」

「秋ぐらいの特定ならいいんじゃないですか」

「じゃ、夏の神様もありだ」

「はいはい、多くの人が、夏の神様がいると思えば、立派に存在できますよ。夏神様として」

「こう言うのは何でしょうねえ」

「神様が何だったのかが分からなくなったので、今がチャンスですよ。新しいのを勝手に作る」

「じゃ、猛暑神がいいですなあ。私が名付けたい」

「だから、一人で勝手に名付ければいいのですよ。神様はいくらでもいますから。無限です」

「あ、はい」

「まあ、昨今、神様を見いだせるのは、よほどの暇人かもしれませんがね」

「仰る通りです」

了